

鹿屋の戦争を振り返る

皆さんは、鹿屋市の戦争の歴史をご存知ですか。鹿屋市は太平洋戦争時において、3つの飛行場が存在するなど、数々の戦争の歴史を有しています。しかし、長い年月を経て戦争の記憶は薄れつつあるかもしれません。そこで、決して忘れてはならない鹿屋に残る戦争の歴史を振り返ります。

【問い合わせ】 市商工観光課 ☎0994-31-1121



鹿屋飛行場

鹿屋飛行場は一夜にして生まれたといわれています。昭和8年7月7日早朝、地区の人が草刈に行くと、多くの旗がゆらめいており、いつの間に誰が測量したか地主ですら知らなかったそうです。その後、昭和11年4月1日に、鹿屋海軍航空隊が開隊。上海渡洋爆撃から終戦まで前戦基地として活動しました。



笠之原飛行場

大正11年6月、40haの農地を農家から借りて地区の在郷軍人や青年たちの奉仕作業によりできあがりました。その後、格納庫・整備工場・兵舎などの施設が増築され、敷地は120haまで拡張されています。しかし、戦争末期の集中爆撃により基地は全滅。今では、地下道への入口が残るだけとなっています。

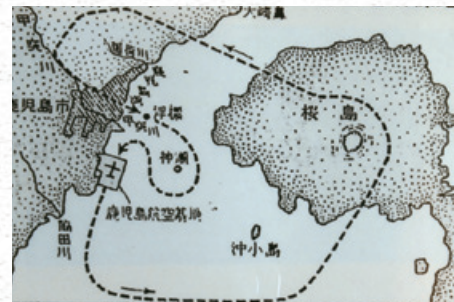


串良飛行場

戦局が悪化をたどる太平洋戦争の末期に、航空機の整備員養成を目的に建設されました。しかし、昭和19年4月には実戦部隊に編入され、さらに昭和20年3月には、特別攻撃隊の基地となりました。終戦までの半年間に、特別攻撃隊363名の飛び立った場所です。

真珠湾攻撃に関する 会談

太平洋戦争は、昭和16年12月8日に、日本がハワイの真珠湾に奇襲攻撃をかけ米軍の太平洋艦隊を壊滅させたことに始まりますが、この計画と訓練に鹿屋が関わっていたということは、あまり知られていないかもしれません。「山形屋デパートを左に見て過ぎると海岸にガスタンクがある。これをかわして、さらに高度を落とし、すぐに魚雷を発射する。撃ったらすぐ上昇、右旋回して敵艦から離れる」・・・これは、旧鹿屋市の市史に記載されている真珠湾攻撃のため錦江湾で行われた訓練の内容です。



▲錦江湾を真珠湾に見立てた訓練

昭和16年2月、鹿屋に司令部を置く第11航空艦隊の大西瀧治郎参謀長は山本五十六連合艦隊司令長官からの手紙を手に、志布志湾に停泊していた第1航空艦隊の源田実参謀を呼び出して極秘会談（通称「鹿屋会談」）を行いました。その後、真珠湾攻撃の準備が始められ、攻撃を前にした昭和16年11月の初めごろまで前述のような訓練が行われていたのです。

基地周辺には多くの 掩体壕

今回掲載した3枚の航空写真は、鹿屋飛行場、笠之原飛行場、串良飛行場を終戦後の昭和22年1月27日に米軍が空撮したものです。

戦時中の市内には、米軍機の爆撃から飛行機を守るための掩体壕が多数造られていました。コンクリート製の頑丈なものから、土を盛っただけのものまであったといわれており、写真にコの字を書いたように見える掩体壕をいくつも確認することができます。

鹿屋飛行場の滑走路は、東西方向に2本。大隅線の野里駅からは、基地内へ引き込み

大きな被害が残された 空襲

写真を見ると、滑走路部分などに大きな穴があいていますが、これは空襲時の爆撃の跡です。

昭和19年12月24日に、はるか上空を悠然と飛行する、銀色の機体が住民によって目撃されています。「米軍の飛行機だ！」偵察に現れたのである爆撃機B29の機影を見て、住民は一斉に逃げ出したそうです。

それからしばらくたった昭和20年3月18日、内之浦方向の空から、まるでカラスの大量のようにして現れた米軍機254機が激しい空襲を行っています。この日は、夕方までに述べ1,400機が来襲。飛行機や海軍工廠が攻撃されたほか、150棟の火災などの被害が起きています。

旧鹿屋市の市史には、これ以降8月12日までの間に行われた空襲による被害の状況が記載されており、それによると家屋の全焼・半焼・倒壊など被害を受けた家屋は4,869棟にも及んでいます。



▲串良海軍航空隊隊門跡



▲串良海軍航空隊地下壕電信司令室跡



▲弾薬庫跡に残る弾痕



▲笠之原町に残る掩体壕



▲野里集落センター内にある第二鹿屋海軍航空隊の記念碑



▲鹿屋会談当時のものと見られるレリーフ